Alexander Laban Hinton,

Why Did They Kill?: Cambodia in the Shadow of Genocide.

Berkeley: University of California Press, 2005, xxii＋360pp.

小林　知（こばやし　さとる）

I

本書は，民主カンプチア政権（Democratic Kampuchea）期のカンボジアでみられた殺人をめぐる研究である。民主カンプチア政権は，指導者の名前を取ってポル・ポト政権，あるいは政治勢力の名を用いてクメール・ルージュ政権とも呼ばれる。同政権は，1975年４月から79年１月までの期間に，都市人口の農村への強制移住，貨幣・市場の廃止，大規模な農業土木事業など数々の革命的政策を断行した。そして，少なくとも150万人を超える大量の死者を生み出し，20世紀の世界史上でも希有な“ジェノサイド政権”として広く知られる。同政権期の死者には，自然死のほか，貧弱な栄養状況と過酷な労働ノルマの強制がもたらした餓死，医療システムの不備を原因とする病死が数多く含まれた。そしてさらに，革命組織の政治的判断に基づく粛清殺人の犠牲者の数も，非常に多かったといわれる。このような状況を知るとき，それが，なぜ，どのように生じたのかという問いを我々は抱く。本書は，この民主カンプチア政権期のカンボジアにおけるジェノサイドのうち，特に粛清殺人の状況に光を当てようとする。

著者であるアメリカ人人類学者アレクサンダー・ヒントンは，1992年，94年にカンボジア国内で調査を行い，民主カンプチア政権下のカンボジアにおける殺人行為をテーマとして，旺盛に研究を発表してきた。その大要は，学位論文“Cambodia's Shadow: An Examination of the Cultural Origins of Genocide.”（1997年）として，エモリー大学人類学部に提出されている。本書は，この学位論文に大幅な加筆を施したうえで出版された，著者の初めての単著である（注1）。

では以下，本書の論述の内容を簡単に紹介する。なお，構成は次のとおりである。

序　論　ジェノサイドの陰に
第１部　壁のない刑務所
　第１章　目には頭を――不釣り合いな報復――
　第２章　権力，パトロネージ，疑念
　第３章　ポル・ポトの傘の陰で
第２部　煙のない場所に起こる火
　第４章　民主カンプチア政権の社会秩序
　第５章　差異の加工
　第６章　面目と名誉の暗黒面
結　論　なぜ人々は殺すのか

II

著者はまず序論で，本書の考察の軸として２つの問いを挙げる。それは，「なぜあなたは殺したのか」（Why did you kill ?）と，「いかにしてジェノサイドが起こるのか」（How does genocide take place ?）である。民主カンプチア期のカンボジアを事例として，殺人の行為者（perpetrater）の動機と，ジェノサイドを可能とした社会文化的状況のダイナミクスを解明することで，我々自身と我々が生きる社会について，より多くの貴重な洞察を得ることができる，と著者は述べる。

人類学は，従来，ホロコーストやジェノサイドを研究対象として扱うことがあまりに少なかった。その背景には，ジェノサイドの恐怖の実態は社会科学的方法では絶対に理解できないという当事者自身の声がある。また，学問的・科学的な視点からの説明が，事件の歴史的事実としての重みを軽減させ，殺人者の責任を問う姿勢に結びつかないという批判も，ジェノサイドの研究が人類学で取り組まれてこな

かった理由である。しかし，沈黙はそれとして危険をもたらす。ジェノサイドの原因を理解しようと努めなければ，その再現を防ぐ対処法は見いだせない。分析の手法と収集した資料の代表性の限界には注意深くあるべきであるが，ジェノサイドの起源とダイナミクスを問う姿勢は必要なのである。ジェノサイドはモダニティと深く複雑な関係を持ち，その関連を解き明かす行為は，悪（evil）を探し出す一方向的な営みではなく，現代社会の現実の一側面を直視する行動である，と著者は主張する。

第１部は，当時のカンボジアでのクメール・ルージュによる殺人行為の概況と，その文化的背景を分析の対象としている。民主カンプチア政権下での最初の殺人の波は，前政権の関係者・協力者や知識人を経歴調査によって洗い出し，標的としたものであった。しかしその後，殺人の対象はクメール・ルージュの内部にも拡大した。つまり，当時のカンボジアでのジェノサイドの加害者と被害者の関係は，“民族”や“搾取階級”といったクリアーな社会的標識によって理解できるものではない。

第１章は，カンボジア文化の行為モデルが，民主カンプチア期の暴力に果した役割を検証する。著者のいうには，報復という観念こそが，カンボジアにおける暴力行為の重要な背景である。クメール・ルージュの政治宣言では，マルクス＝レーニン主義と毛沢東主義の観点から，階級闘争の敵に対する報復が中心テーマとして繰り返し主張されていた。この外来のイデオロギーに基づく攻撃対象の設定は，カンボジア人の行為の文化的特徴を理解する際の鍵である“不釣り合いな報復”（disproportionate revenge）という概念と存在論的な共鳴（ontological resonant）を生み出した。カンボジア人の大多数は仏教徒である。仏教の非暴力の教えは，様々な種類の抑圧や怒りによって“熱く”なった心を静めるよう個々人に促す。しかしそれが常に成功するわけではない。特に，“面目”（face）や“恥”といった観念によって理解が可能な，個人間の紐帯や互酬的交換の道徳的秩序が犯されたとき，“怒り”は暴力へと進む。この過程は，感情表現に用いられるカンボジア語語彙の意味内容の検討や，現地新聞の三面記事をひっきりなしに賑わす殺人事件の事例分析から跡づけることができる。そして，それが究極的には敵の家族成員のすべてを対象とした“完全な破壊”に向かう傾向は，カンボジア民話のモチーフの分析からも裏づけられる。つまり，民主カンプチア期の破壊的な暴力のスタイルは，カンボジア文化の特質への注目によって理解できる。

第２章は，民主カンプチア期の粛清殺人が，クメール・ルージュ内部にまで拡大した理由を探る。著者はここで，カンボジア的なパトロネージと権力の性質の理解が重要であると主張する。東南アジア各地の社会で行われてきた文化分析の多くは，権力を，アニミズム，ヒンドゥー教，仏教の教えが織りなすアニメイティング・エナジー（animating energy）として概念化してきた。カンボジアにおける権力も同様の性質を持ち，時空を超えて変転するものとして捉えられる。しかしその蓄積の度合いは個々人で異なり，ある特定の個人や対象が，権力が集中する“中心”としてその時々に立ち現れる。また，土地の精霊との関係，上座仏教の仏教僧侶と俗人の関係，そして日常的な社会関係の検討からは，より高い効力を有する権力（potent power）との間に庇護関係の結びつきを求めるカンボジア人の姿勢が明らかである。カンボジアの政治状況においては，中心となる権力者とその取り巻き連が常にある。これは，個人的紐帯に基づくパトロネージ・ネットワークのピラミッド型ヒエラルキーである。しかし重要なことに，カンボジア文化には他方で，仏教的な無常観に裏打ちされた一時性（impermanence）の観念がある。それは，個人間関係の安定化を脅かすものである。つまり，権力者とその取り巻き連との関係には，互いに向けた疑念と不審が宿命的につきまとっている。

第３章は，以上の２章で論じた文化分析の要点を理解の枠組みとし，民主カンプチア政権期のカンボジアで繰り広げられた暴力の過程を歴史的にトレースする。ポル・ポトら政権指導部のパラノイア的な状況認識や，クメール・ルージュ内部での粛清殺人の実態についての著者の記述は，二次資料に依拠している。革命組織の中央に位置した幹部らは，権力の集中する“中心”として理解できる。そして，権

力者は配下の裏切りに疑心暗鬼であり，最終的には潜在的脅威の破壊行動に向かった。それが，クメール・ルージュ内部でのライバルの粛清である。その際には，ライバル個人だけでなく，そのパトロネージ・ネットワークや家族成員の全体が破壊の対象となった。

第２部は，民主カンプチア期に殺人行為を行った人物の動機づけの問題を，ミクロレベルからマクロレベルにまで視点を移動しながら取り上げる。

第４章は，首都に設けられた政治犯収容施設ツールスレンに残された尋問文書の分析などから，当時の社会秩序の構成を分析する。マルクス＝レーニン主義的な階級意識という外部発のイデオロギーは，地位，個人間の相互行為，ヒエラルキーなど秩序構成に関わるローカルな概念と結合し，革命組織の基準に則した“好ましい政治意識”という表現を生み出した。著者のいうには，当時の革命組織内の政治秩序は，仏教的諦観に由来する自己放棄と忠誠心に基づく文化心理学的な視点から理解ができる。ここでも，カンボジア語語彙の意味分析が，社会的行為の理解に用いられている。

第５章は，民主カンプチア政権が，明示的な他者をいかに創出し，攻撃対象としたのかを論じる。問題の核は，アイデンティティと所属のカテゴリーの本質化をめぐる社会過程であり，著者はそれを“差異の加工”（manufacturing difference）と呼ぶ。つまり，政権がある社会政治的カテゴリーを対象として，何らかの差異の烙印を明示化させると，本来流動的な人々のアイデンティティが固定する方向に動き出す。そしてそのカテゴリーの下で他者として可視化された人々は，政権の具体的政策によって殺人行為の標的となった。以上の暴力のパターンは，カンボジア史上に数多くみられるヴェトナム系住民排斥政策や，政治犯収容施設での尋問・拷問方法が特徴とする脱人間化のプロセスにおいて明らかである。

本章の後半は，さらに，革命組織の命令で殺人を犯した殺人者の動機づけを論じる。著者のいうには，民主カンプチア期の殺人行為の理解については，国家が用意した全体主義的な状況のなかで殺人者が抱いた存在論的な恐怖，孤独，不安に注意を払う必要がある。そこでの犠牲者とは，殺人者自身の存在論的な感覚が一方向的に差し向けられるアイコンであった。閉塞的状況のなかでの内的な葛藤の後に，殺人者は，自己の新しい価値に基づき，自身の存在と被害者の間の差異を固着させる営みとして，殺人行為に及んだ。象徴人類学，精神分析・心理学の概念を用いながら，著者は，殺人者は命令に従った自動人形ではなく，その行為に向けて新たな意味構築を行う主体であったと繰り返し強調する。

第６章は，グループダイナミクスの視点から，面目と名誉に関連した文化モデルが，いかにクメール・ルージュ兵士の殺人の動機づけと関連していたかを論じる。第１部で触れた面目と名誉に基づく行為パターンについての見解を繰り返した後，著者は，政治意識，忠誠心，旧社会の価値観の放棄といった革命組織が主張したイデオロギーを，クメール・ルージュの兵士は具体的な行動として示す必要があったと述べる。殺人は，仲間内で面目と名誉を維持し，地位を高める手段であった。革命の栄誉が称揚され，差異のカテゴリーが本質化されて目前に示されたなかで，少年期にリクルートされた年若い兵士たちは，自己のアイデンティティを探求する行為の一部として“敵”を殺した。革命組織はまた，これらの行為が日常的な公務として行われるよう，没価値的な官僚システムも用意した。

最終章は，序論で提示した２つの問いに対応する形で，以上に論じた著者の主張をまとめる。まず，「いかにしてジェノサイドが起こるのか」という問いに関する議論の整理としては，ジェノサイドの発生の下地となる社会経済的変化，政治状況の転換を指す“ジェノサイド・プライミング”（genocide priming），その後の差異の結晶化とそれを標的とした大量殺人の過程である“ジェノサイド・アクティヴィゼーション”という２つのプロセスの理解が重要であると著者は述べる。また，「なぜあなたは殺したのか」というジェノサイド状況下での殺人者の動機づけの問題については，マクロレベルのイデオロギーから心理文化的（psycho-cultural）価値体系の側面までを，詳細に分析する必要がある，と主張する。殺人者の動機づけを，命令への服従という説

明に収斂させてしまう意見は受け入れられない。還元論的な説明を超えて，殺人者の複雑な心理的過程によりいっそうの光が当てられるべきなのである，という。

III

正直なところ，1990年代の日本で文化人類学の世界を知り，現在カンボジア農村で調査研究を行う評者の視点からは，本書の論述に対して大きな違和感を表明せざるを得ない。評者は，著者が用いる概念のうち，対象関係理論といった精神分析の理論にはまったくなじみがない。よって，本書の細かい部分の論述に完全な理解を口にするつもりはない。しかし，その種の複雑な概念操作を支えるべきカンボジアの社会・文化に関する著者の分析と記述は，端的にいって，過度に単純である。

本書の特徴のひとつは，ジェノサイドの文化的次元を研究の俎上に載せるという明確な姿勢である。著者は，イデオロギーに直結した行為論を批判し，それがローカルな文化的状況のなかで形を変え，既に確立されていた文化的理解のラインに沿って書き換えられるプロセスを取り上げようとする。しかし，“ダイナミクス”，“複雑な過程”といった表現の繰り返しが強調する分析レベルの深遠さに対して，現地語語彙の意味内容や民話のモチーフ，仏教教義を対象とした文化分析は，一面的である。また，本書のもうひとつの特徴は，ジェノサイド的状況下での殺人者は自動人形ではないという主張である。ジェノサイドという現象は歴史的事実であり，殺人という行為は現実世界の一部である。この意味で，著者は，イデオロギーの教化作用といった視点だけでは汲み尽くせない，人間存在の深部に分析の光を当てようと試みている。しかし，それが“我々人間”と“異文化の他者”という文化相対主義的視点の断絶を架橋することに成功しているとは思われない。殺人者の動機づけに関する分析の部分で，人間としての残虐性や暴力行為がもたらす悦びの感情の検討と，殺人後に死者の肝を切り取って食べたというクメール・ルージュ兵士の行為についての文化的解釈とは，並記されるだけで，統合されていない。

著者は，“文化モデル”といった心理人類学の概念に強い信頼を抱いている。しかし，その仮説構成体としての有効性が本書において説得的に示されているとは思われない。この不満は，文中でのカンボジア人インフォーマントの描かれ方にも通じる。つまり，「アシスタントのひとり」，「あるNGOのスタッフが」，「ある高位の仏教僧侶が」といった具体的経歴を欠く没個性的な“文化の担い手”しかそこには示されていない。著者が多用する“存在論的”，“実存的”といった分析表現を支えるだけの厚みが，現地社会についての記述に感じられないのである。

また，本書を読み進めるなかで，評者はルース・ベネディクトの『菊と刀』との記述スタイルの類似性を何度も連想した。『菊と刀』に代表されるアメリカ社会科学の第２次大戦下の国民性研究が，その後文化本質主義的であるといった批判にさらされた歴史を，著者は本書を書く際重々承知していたであろう。知識社会学的な観点から，21世紀の初頭に出版された本書の学問的背景を約半世紀前の歴史的状況に遡及して比較検討することは，アメリカ社会と，そこでの人類学という学問の特徴について貴重な洞察をもたらすものと考えられる。書評というこの場では探求することができないが，評者自身が，他日機会を改めてぜひ論じてみたい。

（注１）　著者には，ジェノサイドの人類学的研究をテーマとした編著が２冊ある［Hinton 2002a; 2002b］。

文献リスト

Hinton, Alexander Laban ed. 2002a. *Genocide: An Anthropological Reader*. Malden, Mass.: Blackwell.

——— ed. 2002b. *Annihilating Difference: The Anthropology of Genocide*. Berkeley: University of California Press.

（京都大学東南アジア研究所・日本学術振興会特別研究員）